

第二十章 大地の設計者 宮沢賢治 温泉を中心に（講演）

実は一昨年（二〇一六年）、日比谷図書文化館で、昨年（二〇一七年）は岩手大学で、私は「大地の設計者 宮沢賢治」というタイトルの講演をしています。講演場所に応じて変化をつけながら。今回、受講者の皆さんは、明日、花巻温泉や大沢温泉へ行かれるそうなので、「温泉」に重点を置いてみようと思って「温泉を中心に」と副題をつけた次第です。

まず「グスコープドリの大学校」という講座名と、「石と賢治のミュージアム」（岩手県一関市東山町）という会場を考慮して、「グスコープドリの伝記」（一九三三年）を切り口にしてみます。ブドリは、「イーハトーブ」県の山村に木樵きこの子供として生まれ、十二歳で、冷害による飢饉で両親を失います。飢饉後、テグス（天蚕）の仕事に雇われる。自分の山の小屋がテグス工場に改造されてしまい、そこで働かされるわけです。けれども、火山灰が降ってテグスが全滅したので、山を降り、野原で農民から雇われ、「沼ばたけ」で「オリザ」（稲）を作る。そこに六年ほどいると、今度

は早魃が起きて、この仕事もなくなってしまう。ブドリはさらに土地を降り、「イーハトーブの市」の学校でクーボー博士に学び、博士の推薦でイーハトーブ火山局技師という職を得ます。

サンムトリ火山の爆発が間近になり、ともに噴火すると熔岩が町に注いでしまうというので、人口噴火させ町に熔岩が向かわないようにする。クーボー博士の発明と計画によって潮汐発電所がたくさん造られるというエピソードもあります。執筆当時、海外で潮流を利用して発電を行おうという試みはあったけれど、実現していなかった。それを賢治は描いているのです。イーハトーブ火山局では、潮汐発電所で得た莫大な電力を使って、飛行船から上空に電流を流し人工の雨を降らせる。ただの雨ではなく、空気中の窒素を活用して一種の窒素肥料を含んだ雨。ところが冷害の兆候が顕れます。西の海の海流の温度が通常より低くて、このままだと冷たい風が夏にやって来て冷害になってしまう。そこで火山島のカルボナード島を人工噴火させ大量の二酸化炭素を空中に放出させることで、冷害を回避しようという話になって、ブドリは自己犠牲的に火山噴火で亡くなります。

この晩年の作は、明らかに宮沢賢治の気象学や地質学の豊かな教養に基づいている。盛岡高等農林学校で土壌や地質について学んだことがしつかり活かされている。と同時に、晩年の東北砕石工場技師としての活動が反映されていると思います。ブドリが火山局技師なのに対し、執筆当時の賢治は東北砕石工場技師でした。また、クーボー大博士には盛岡高等農林での指導教授・関豊太郎のイメージが強く反映しているといわれています。東北の冷害が何で起こるかについていくつか説があったなか、関豊太郎説は、夏に三陸沖で寒流の勢いが強くなると、冷たい風（ヤマセ）が吹い

て冷害を引き起こすというものでした。また、宮沢賢治と発電や電気のあいだには、非常に深いつながりがあります。彼は花巻で、花巻電気株式会社（一九一二年操業開始）による生活の劇的变化を体験していました。彼の実家は豊沢川が北上川に注ぐ河口にありましたが、花巻電気株式会社の電気は豊沢川の水力発電によるものでした。

ブドリの方に話を戻しますと、山の木樵の子がだんだん平地に下って、農家で稲作を学び、つぎに学校で科学的知識を学んで、その知識を活かしながら、ふたたび山に上り、火山の力を利用して平地の農業を助ける、という展開になっています。寒流が強まるという人間にとってマイナスな出来事に対し、火山噴火というマイナスの出来事を組み合わせることによって、ブドリはマイナスにマイナスをかけてプラスに転じるというか、中和させている。この展開は、宮沢賢治自身の経歴を考えると非常にもおもしろいと思うのです。

賢治は稲作指導や耕作を志して盛岡高等農林学校に入ったわけではありません。「農芸化学」に進んで、もっぱら土壌や、土壌のもとになる岩石の研究をしました。盛岡高等農林時代、賢治はハンマーを持ってどんだん山のなかに入っている。研究生、今でいう大学院生の頃、進路に悩みますが、その時にも父親へ、山に入って木材の化学物質を蒸留する仕事や、鉱石を探す仕事などしたいと訴えています。非常に山へ向かう志向が強いわけですね。花巻農学校に職を得た結果、しだいに農業、特に稲作に関わり、肥料設計を精力的にやるようになっていった。「本統の農民」になるんだといって、独居自耕し、羅須地人協会の活動をはじめますが、いろいろな事情で二年ほどで挫

折しています。最後に彼が得た職が東北砕石工場の技師でした。そこで北上産地の石灰岩抹からなる肥料の改良や販売に従事しました。

つまり、賢治もまた、山から田畑に降りてきて、農民として生きることには挫折し、山の方へ戻っているわけです。ただ山の方にずうっと行ってしまうというのではなくて、山に潜んでいる力を、農業のプラスになるように活用しようという方向性で。これは表面的にはブドリの人生とは似ていませんが、根本的には重なっているでしょう。

賢治が東北砕石工場でやった石灰肥料の仕事は、寒流による冷害を火山ガスによって中和すること、かなり似ているところがあります。岩手県地質を単純に図式化すると、北上川が真ん中を北から南に流れていて、その西側に火山性の奥羽山脈があり、東側には非火山性の北上山地があつて、アルカリ性の石灰岩や蛇紋岩が豊富に眠っている。石灰岩は海底に沈殿したカルシウムからできているので、いわば「水」の性格を持っています。対照的に、「火」の山である奥羽山脈の、火山灰や火成岩の風化物からできた粘土質の土壌は、非常に地味乏しく、強い酸性で、一般的に農業に向かない。賢治の石灰抹肥料の普及活動とは、こうした岩手県の二系統の異なった山の性質をブレンドすることによって中和しようとする仕事といえます。

ところで、宮沢賢治は、農業改革を中心とした社会的実践家であると同時に、天才的詩人であり童話作家です。この両面をどういうふうに関連づけ、全体として捉えるのか。そこが宮沢賢治研究の非常に難しいポイントで、研究者はどちらか片方に特化するケースが多い。しかし、賢治の農業

関係の仕事を、大地に潜んでいるいろいろな隠れた力を取り出して活用したり、それらの力を新たに組み合わせたりすることで世の中を望ましい方向に持つていこうとする企てだとすれば、文学において賢治がやっていることも同質性を持つている、そう私は思うのです。賢治の書き方は、普通の作家のように注文に応じて書斎で原稿用紙を埋めていくのとは全く異なっていました。外に出かけ、自然味の豊かな場所、特に高原とか山地とか野原へ行く。それでその場所やその時の天候などからインスピレーションを受け、それをメモ帳にまず書く。そうしたメモをもとに、時間においてアイデアを膨らましたり、異なったメモを総合したりしながら、作品にまとめる。賢治自身も、自分の書き方が普通の作家とは違うということを早い時期からはっきり意識しており、自分の書くものを「心象スケッチ」と呼んでいました。

「竜と詩人」では、退位した老詩人が新たな桂冠詩人スールダッタを讃えこんな詩をうたいます。

風がうたひ雲が応じ波が鳴らすそのうたをたゞちにうたふスールダッタ

星がさうならうと思ひ陸地がさういふ形をとらうと覚悟する

あしたの世界に叶ふべきまことと美との模型をつくりやがては世界をこれにかなはしむる予言者、

設計者スールダッタ

普通、文学者は「設計者」とは思われていませんが、宮沢賢治はすぐれた文学を「設計」と受け止めているわけです。詩人が目の前に見える現実とか出来事を再現的に描写するのではなくて、大地に潜むさまざまな力を見抜いて引き出し、新しく組み合わせ、形を与える、そのことでより良い未来が開けるんじゃないか、そう賢治が考えていたことがわかります。

『注文の多い料理店』出版時に賢治自身が書いた「広告ちらし（大）」でも、こうした考えは表明されています——「これは田園の新鮮な産物である。われらは田園の風と光との中からつややかな果実や、青い蔬菜を一緒にこれらの心象スケッチを世間に提供するものである」と。場所から得たインスピレーションに基づいた作品を、人々のために提供する田園の新鮮な産物、果実や蔬菜（野菜）になぞらえているのは、単なる比喩ではない。果実や野菜を作ることは、作物を放置していたらまず不可能です。自然の働き、たとえば雨や太陽の光、土の中の養分などを利用しながら、人の手による補助を加え、上手く按配することによって、農業は成り立つ。単なる自然の肯定でも否定でもありません。同じように、賢治の文学創作も、目の前の現実の単なる描写でもなければ、個人的な空想でも、インスピレーションだけの走り書きでもない。賢治にとって、文学作品を書くということと、農業に携わったり農業を援助したりするということは、根本的にはそんなに違うない営みだったはずです。

では、それが、いったい「温泉」とどう関わってくるのか。まず、「グスコブドリの伝記」のなかでイーハトーブという場所がどう呈示されているのかを紹介したいと思います。ブドリが就職

したイーハトーブ火山局には、イーハトーブの地形模型、ジオラマのようなものがあって、これが実際の火山の観測計器と通じており、火山の動向とか噴火の煙などがそこに表示される。ブドリはそれを見ているうちに、しっかりとイーハトーブの地形や地質を理解します——「もうブドリにはイーハトーブの三百幾つの火山と、その働き工合は掌の中にあるやうにわかつて来しました。じつにイーハトーブには七十幾つの火山が毎日煙をあげたり、熔岩を流したりしてゐるのですし、五十幾つかの休火山は、いろいろな瓦斯を噴いたり、熱い湯を出したりしてゐました」。火山帯としてのイーハトーブの特徴として、ちゃんと温泉も入っているのです。

私は宮沢賢治研究をしていて、ある時、賢治と温泉のあいだには深く複雑なつながりがあるということに気づきました。そして、今までそれについて本格的先行研究がないということに驚いてしまい、賢治と温泉の関係の研究にのめり込んでしまいました。

鉄道省が出した『日本案内記 東北篇』中の地図をご覧ください「図35」。賢治の生前の昭和四年、一九二九年の出版。東北本線にほぼ沿って北上川が北から南へ流れています。花巻で温泉があるのは西側の奥羽山脈の裾野の方ですが、大きくふたつの温泉地帯があります。一方は賢治の家もある豊沢川沿いです。豊沢川の河口を遡っていくと、いちばん低いところに志戸平温泉。もう少し行くと大沢温泉があります。さらに遡ると鉛温泉、その少し奥に西鉛温泉がありました。西鉛温泉は、一九一八年頃から借金で実質的に宮善（賢治の母方の宮沢家）の経営となり、一九三四年、正式に譲渡されています。一九七二年に廃業し、現存しません（新鉛温泉とは別もの）。もうひとつ



図36 新網張温泉本館「沢松閣」(『図説 盛岡四百年』下巻Ⅱ、郷土文化研究会)

子供たちも参加して、皆で歌をうたったり、隠し芸を披露したりし、大沢温泉から鉛温泉まで温泉のはしごをすることもありました。単なる仏教の勉強会ではない。古くからある夏場の温泉での避暑湯治を活用した、町衆どうしの結束や世代間の繋がりを強める場でもあったのだらうと思います。

また、賢治は花巻農学校の先生になると、温泉によく遠足に行っています。寄宿舎の生徒を夕方から誘って、徒歩で数キロ歩いて温泉地に出かけるということを繰り返しました。

賢治の地質学や岩石に対する興味も、温泉と絡んできます。一九一〇年(明治四十三)、盛岡中学の教師の引率による岩手山登山時、下山の途上、網張温泉に泊まっています。また、一九一六年(大正五)、高等農林二年次、岩手山南東麓の地質調査の際、山麓の網張温泉から温泉を平地(滝沢村鶴飼)にまで引いて一九〇九年に開かれた新網張温泉(新盛岡温泉・盛岡温泉とも呼ばれた。現存せず)に泊まっています〔図36〕。

賢治の温泉利用は、旅先での逗留を中心とした普通の作家の温泉利用とは相当違ってきます。夏目漱石が道後や湯河原へ行

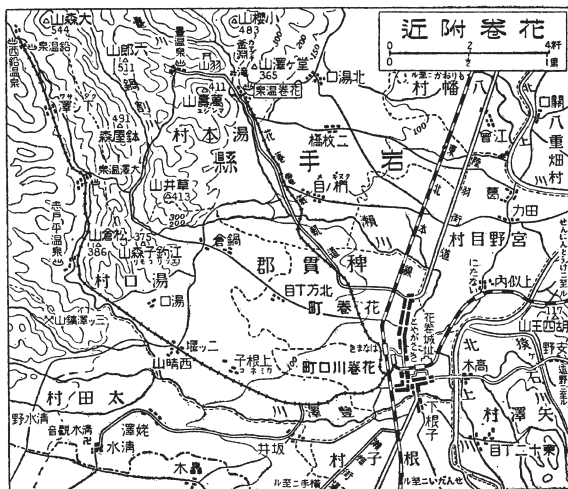


図35 「花巻附近」(『日本案内記 東北篇』鉄道省)

の温泉地帯は、台川(瀬川支流)沿いで、上流に台温泉、手前に花巻温泉があります。かつては農民や漁民に湯治の風習が広くありましたが、花巻の町衆にもごく普通にありました。宮沢家の場合、西鉛温泉と志戸平温泉によく出かけています。賢治も中学生の頃ウルシで顔を腫らしてしまった時、学校を休んで志戸平温泉で湯治をしています。西鉛温泉と宮善の縁は話しましたが、志戸平温泉にも実は似た事情がありました。志戸平温泉の先代が書いた私家版の半生記によれば、日露戦争後の不況時から二十三年間(ちょうど賢治の時代)、志戸平温泉も土地や源泉権や建物の権利を宮善に押さえられていたそうです。

あともうひとつ、宮沢家の人たちがよく利用していたのは、大沢温泉です。父・宮沢政次郎や、花巻の豪商で浄土真宗の人たちが、大沢温泉で夏期仏教講習会を催し、皆で一緒に合宿をしたのです。有名な僧侶や仏教学者が講義をするだけではなくて、レクリエーションの時間もかなりあった。

くとか、川端康成が伊豆の温泉へ行くというのは違って、地元の温泉ばかり利用してたわけです。実証は難しいですが、他の作家の場合とは異質な温泉利用が賢治に大きな影響を残していると私は見ています。

賢治自身は、町衆の裕福な家の長男です。なのに、なぜ、山へ向かう志向が強く、作品に山に関する事柄がしばしば出てくるのか。景色や岩石だけではなくて、マタギのことや、山の生活、山の民俗、山の伝説にまで通じているのか。花巻の町場に住んでいる小学生が山に行くことは普段は無理ですが、湯治の時ならできるわけです。しかも、家の近くを流れている豊沢川を遡って行くかたちになります。

賢治は十歳頃から豊沢川の河原の石を集め出し、「石っこ賢さん」といわれたといえます。河原石が流れてくる上流に対する好奇心が当然あつたはずでしょう。それがどんなだか、温泉に行けばかなりわかつたわけですね。川岸に岩石がむき出しになっているのですから。当時、志戸平温泉の湯坪は、川岸の岩窟にありました。鉛温泉では、川底の岩盤をくり抜いた湯坪に入ることになります。足の下が泉源で、じかに湯が湧いている。地下は一体どうなっているんだろうと、きっと考えたことでしょう。温泉は、賢治の地質学的興味の芽生えに相当影響を与えたのではないのでしょうか。

また温泉には、山関係の人も骨休めに来たり、商売に来たりしていました。「なめとこ山の熊」には、「鉛の湯の入口になめとこ山の熊の胆ありといふ昔からの看板もかかつてある」という描写が出てきます。実際、鉛温泉からさらに上流、豊沢ダム建設によって一九六〇年代に沈んだ豊沢集

落に、なめとこ山あたりで熊を捕っていたマタギがいて、「熊の胆」を商っていたという背景があります。

大沢温泉に関して、少し補足しておきます。盛岡中学三年の夏休み、本人が友人への手紙(書簡○a、一九一〇年九月十九日付、藤原健次郎宛)に書いたことですが、賢治はここで大事件を起こしているのです。賢治は給湯の仕組みに興味を覚え、湯屋の外側を見てみた。川底から水車で源泉を汲み上げて、それを樋で湯屋に流し落とす。その樋の途中で、山側からの清水を引き込む別の樋が組み合わさり、お湯が熱過ぎる時はうめられる仕組みになっていた。けれども、清水の方は途中で仕切りがしてあつたので、それはずしてみたというんですね。そしたら、湯屋のなかが大騒ぎに。山の冷水が、土石やヘビの抜け殻、蛙の死骸などと一緒に滝のように湯槽に流れ込んでしまったのです。しかも湯屋のなかでは巡査が宿の主人に「男女混浴はいかん」と説教している最中だったので、巡査の白い服もドロドロになってしまった。「面白くおっかなかつたね」なんて賢治は感想を書いていました。

皆さん大沢温泉に行かれても、これが正確にどこの湯屋なのかはわかりません。私はいろいろ調べてみました。当時の大沢温泉の絵葉書「図⑩」を見ると、豊沢川を挟んで建物が並んでいますが、奥に、現在もある「く」の字型の木の橋「曲り橋」が確認できます。そちらが上流側。向かって右側の岸の木々の中に見える長い建物「菊水館」です。菊水館からやや降りた川辺に小屋が立っていて、小屋にはなにか木の施設が付属していますね。これらがぐだんの湯屋と、温泉を川



図37 大沢温泉絵葉書(筆者蔵)



図38 1914年頃の夏季仏教講習会(『新校本 宮澤賢治全集』第16巻下・年譜篇)。前列右から6人目が賢治

底から汲み上げる木製水車です。どちらもうありませんが、当時はこれが大沢温泉の売りだったのです。この絵葉書のキャプションにも「滝ノ湯」と書かれています。実は、子供の頃の賢治が写っている夏期仏教講習会の記念写真「図38」にも、この湯屋は写っています。左端ですね、切り妻の壁に戸口があつて、浴衣の人が入ろうとしています。

話を進めましょう。じつに賢治らしい温泉との関わりだと思ふのは、地質調査の拠点として温泉に泊り、やがて地質科学の知見を通して温泉を見つめなおしたことです。盛岡高等農林研究生時代の一九一八年、彼は「稗貫郡地質及土性調査」というものを行います。これは稗貫郡が、農林業・産業振興のための基礎調査として、関豊太郎教授に依頼した事業です。賢治は、指導教授だった関教授の手足となつて現地調査に従事しました。北上山地側へも行っていますが、主に奥羽山脈側、特に花巻の温泉地帯を、鉛、台、大沢に泊まつてずいぶん歩いています。調査結果は『岩手県稗貫郡地質及土性調査報告書』(一九二二年)にまとめられましたが、かなりの部分を賢治自身が執筆したといわれています。奥羽山脈に関する部分を読むと、温泉がどこに湧くのかやその原理が書いてあります。また、温泉が点在するこの地帯が非常に強い酸性土壌で、かつ土壌の養分が乏しいことが指摘されています。それから鉛・大沢間の下シ沢では「下シ沢石」という気泡の多い凝灰岩が採れ、耐火石として利用されているとか、台川の方では、陶土に向いた粘土や、温泉の作用を受けて磁器に向いた岩石が埋蔵されているといったことも記されています。実際、すでにこれを利用して「台焼」という焼物が台温泉で作られていました(現在の窯場は花巻温泉門前に位置する)。

賢治は温泉を見る時、その周囲の地質的な条件が人々の生活・産業にマイナスになったりプラスになったりすることまで見ていたのです。温泉が湧いていない場所に太古の温泉の痕跡を見るまなざしさえ備えていました。農学校の教師時代に書かれた「台川」という作品があります。毎秋、生徒たちによる台川沿いの地質巡検が催されていました。賢治が引率者となって、岩石や地質、その植生や樹木への影響などを解説し、おしまいに台温泉に宿泊する、という行事。その様子が私小説的に書かれています。

志戸平のちかく豊沢川の南の方に杉のよくついた奇麗な山があるでせう。あすことこゝとはとても木の生え工合や較べにも何にもならないでせう。向ふは安山岩の集塊岩、こっちは流紋凝灰岩です。石灰や加里や植物養料がずうっと少いのです。ここにはとても杉なんか育たないのです。

北上山地より土壤が貧しい奥羽山脈のなかでもさらに差があつて、志戸平温泉付近は、地盤が中性の安山岩集塊岩である関係で、流紋凝灰岩の地盤の台川一帯に比べれば地味が豊かなので、木々がよく茂っているのだ、と説明しています。生徒が「先生この石何て云ふのす」と質問をすると、賢治先生は「凝灰岩。流紋凝灰岩だ。凝灰岩の温泉の為に硅化を受けたのだ」と答える。「硅化を受けた」とは、温泉に溶け込んでいた石英が岩の内部に浸透したという意味です。さらに先生はこ

んな解説をします、「こゝをこらんさい。岩石の裂け目に沿つて赤く色が変わつてゐるでせう。裂け目のないところにも赤い条の通つてゐるところがあるでせう。この裂け目を温泉が通つたのです。温泉の作用で岩が赤くなつたのです」。

さて、私のお話の後半に入ります。賢治は直観や科学的知識によつて、大地に潜んでいる潜在力を見抜くフィールドワーカーであるだけでなく、それを人々のために活かそうと考える技術者でした。そうした実践の始まりを告げる重要な資料があります。一九二四年初夏の「修学旅行復命書」です。これは文学ではなく、花巻農学校初の修学旅行の引率をした賢治が学校に提出した報告書ですが、賢治は、通常の報告書の枠をはるかに超えて、どのように農学校として花巻の将来に貢献していくべきかをいろいろ提言しているのです。

そのひとつが、温泉利用温室というアイディアです。実際、花巻温泉に一九二四年十二月に最初の温泉利用温室が作られ、一九三二年、第二号が作られています。そこでできた野菜は温泉客の食事に提供されたり、園芸植物は温泉客のお土産物になったりしていました。これはおそらく宮沢賢治のアイディアによるものだったでしょう。花巻温泉では叔父が経営に関わったり、農学校の教え子が園芸主任をしたりしていました。なお、近くの台温泉でも、一九二五年、温泉を利用した温室が作られています。

第二の提言は、「近時温泉地方の発達に伴ひて」観光土産の需要が高まつているので、それを創出しようというもの。一九一五年から一九二五年にかけて、電気鉄道が豊沢川沿いの温泉地へ延び

ていきました。一九二三年には、台川に望んで花巻温泉が開業しました。台温泉は狭い谷であり大きな施設は造れないので、少し下流の広い土地がある場所に、台温泉から引湯して、リゾート型かつ遊園地型の温泉を開いたのです。花巻温泉開業以前、花巻近郊の温泉を利用していたのは岩手県の人々がほとんどでした。花巻温泉は規模が違って、東京や大阪の市民をターゲットにしたばかりか、外国人誘致も行いました。それで非常にたくさんのお客が花巻へ来るようになった、という現実があるわけです。ところが、そうした観光客に適した「独創的産物」が花巻にないので、農学校として新たな名物を考えるべきと賢治は説き、具体的候補として、菊芋を使った「富錦」(代用米)とか、シベリア風のクルミのハチミツ漬けを挙げています。

第三の提言は、農家の家屋や農村風景の改革です。北海道から戻ってきて感じるのが、あちらの農家が明るく「風致津々」なのに比べ、地元のお客が「不経済にして陰鬱」なことだ。そこで農学校が家屋の改良案を打ち出して岩手県物産館に展示すると良い、と書いています。また、建物自体を変えなくても、農家の周囲に、白樺、ドイツトウヒ、ヤマナラシなどを植えるとか、オニゲシを添えるとかするだけで、農村の景観は一変するとも書いています。

第四は、風景認識自体の改良です。皆あまりにも郷土の風景になじみすぎて退屈しているが、見方を変えさえすれば、そこに潜み隠れた美を再発見できると述べ、この転換を「欧米の観光客の心地を以てその山川に臨まん」というふうに表示しています。

第五に、札幌で学生を連れて歩いている途中、石灰岩を販売している会社を見かけた賢治は、

郷土の酸性土壤改良のためには北上山地の石灰岩を利用するのが良いという見解を語っています。

ここには、その後の賢治の実践につながっていくものが相当あります。「欧米の観光客の心地を以て」という点に関して言いますと、この頃賢治が書いている文学自体に、まさにそういう姿勢が見つかります。「岩手県」と書かないで「イーハトーブ」と書き、北上川の小舟渡(こふなと)という岸辺を「イギリス海岸」と命名する。そのことによって、気づかなかった風景の美質が浮き立つ。宮沢賢治の文学には郷土の風景を再発見するというモチーフが意図的に入っています。極端に言えば、宮沢賢治の文学自体に観光を促進する性格がある。

植樹や園芸による風景改良というアイディアは、当時の造園界における新しい動きの影響を受けています。賢治の手紙や作品に「装景」という言葉が出てきます。これは、アメリカで生まれて流行っていた「ランドスケープ・アーキテクチャー」を日本に導入する意図から、田村剛(たむら 剛)という東大の造園学者が作った翻訳語です。ランドスケープ・アーキテクチャーとは、文字どおり風景を建築することです。従来の造園が、塀や垣根で囲まれた限られた土地を美しくデザインすることだったのに対して、外に開かれていたり社会活動に開かれていたりする土地、例えば道路の周囲とか工場の周辺を心地よくデザインすること。生活と関係のある敷地を、その利便性を損なうことなく、地形や歴史を踏まえながら、心地良いものに改造することが重視されます。現在、日本では、もっぱら「ランドスケープ・デザイン」という言葉が同義語として使われています。賢治は、この概念を田村剛が主張した『造園学概論』を購入していました。『造園学概論』では、「装景」すべき場所

として、道路や工場などのほか、温泉も挙げられています。

賢治は、この後、自分で「装景」を実践していきました。一九二四年春、賢治は農学校の「装景」をやっています。農学校の並木や庭園の設計を引き受けて、学生を指導しながら整備しました。その際、桜の苗木が余ってしまうと、学生たちにそれを持たせて花巻温泉へ行つて、桜並木をこしらえました。そして、農学校出身で花巻温泉園芸主任の富手^{はじめ}一に一九二五年頃¹⁰（推定）に送った手紙（書簡二二九、日付不明）で、花巻温泉の土壤改良と植樹指導を細かく指示しました。やはり土壤に関しては、地味に乏しく、粘土質で水はけも悪く、強度の酸性だから、石灰岩抹で改良しなければいけないと述べています。植樹に関しては、植える場所の景観や、水っぱい場所やそうでない場所の違い、その木がどのくらい成長するかといったことを考えながら、なにをどこに植えるべきか細かく指導しています。一九二六年（大正十五／昭和一）あたりに実際に賢治自身が設計図を書き、花巻温泉の貸別荘地区に、庭園と言つていいほど凝った造りの花壇を、少なくともふたつ造りました。さらに一九二七年には、山裾に「南斜花壇」という大規模なものを造りました。賢治は温泉観光に直接関わっていた、というわけです。

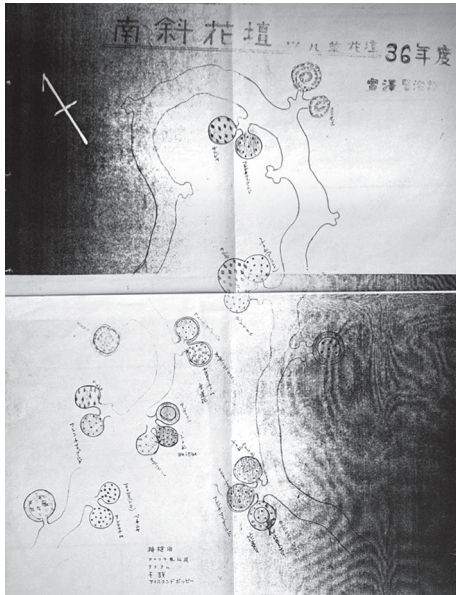
昭和初期に描かれた金子常光画「花巻温泉図絵」があります〔第十五章図⑮⑯〕。広い敷地の周囲に、いろいろな特色や格の旅館が並んでいて、最高格が松雲閣別館。もう廃業していますが、まだ建物は外から見られますので、花巻温泉へ行ったら注意してみてください。七号別荘と八号別荘、九号別荘と十四号別荘の間の二ヶ所が、賢治が造った花壇です。花巻温泉の最も顕著な特徴は、中心部を

碁盤目状に区画し、田園都市的な貸別荘地区としたことです。ここにふたつ草地の斜面があり、右の斜面に花壇が描かれています。これが「南斜花壇」です。現在の「花巻温泉バラ園」の基礎になつており、「花巻温泉バラ園」内には南斜花壇跡の碑があります。

戦前の花巻温泉俯瞰写真〔第十八章図⑳〕に、賢治が造った通称「対称花壇」(SYMMETRICAL GARDEN)が写っています。その近くに、丸い花壇があつて、中心にポールが立っています。「日時計花壇」です。一九八〇年代に「対称花壇」は駐車場のために潰されてしまいましたが、「日時計花壇」はバラ園の隅に移されて現存します。

花巻温泉側が作成した「南斜花壇」

図面の青写真〔図⑳〕には「36年」と記されており、一九三六年の可能性もあります。おそらく昭和三十六年（一九六一）のものでしょう。「南斜花壇」の敷地は、そもそも小スキー場だったのです。冬はいいけれど、夏は山がはげたみたいで見苦しかった。たぶんそこで宮沢賢治に花壇を作ってくれ



図⑳ 「南斜花壇」図面（花巻温泉株式会社蔵）

ないかという依頼があったのでしよう。これは下から上まで奥行きが九十メートル近くあったようです。この設計意図についても、宮沢賢治は富田一に手紙（書簡二二八、一九二七年四月九日付）を書いていきます。それによると、くねくねした小径が蔓草の蔓に見立てられていて、丸い花壇の部分が蔓草の実に見立てられていた。「対称花壇」や「日時計花壇」の幾何学的・対称的なデザインは西洋によくあるタイプですけれど、この手のものはいろいろ調べても見たことがありません。ここには童話的な発想がありますね、「ジャックと豆の木」の豆の木みたいに、蔓草が巨大化したともいえますし、賢治には蟻の視点で書いた「蟻ときのこ」という童話がありますが、小さな虫になって蔓草を這っていくような見立てともいえます。

やはり宮沢賢治的で面白いのは、もっぱら洋品種であるペチュニアやシャスターデージーなどを植えたにもかかわらず、岩手県の山地の高原の景観をモデルにしていること。そのために、他の高原から持ってきたスズランですとか翁草などを点在させている。敷地に自生していたススキやカタクリも取り入れている。その土地の持っている特質と、新しい西洋的な要素を組み合わせるというのは、賢治童話と同じです。無国籍といえば無国籍で、まさにイーハトーブ。

宮沢賢治にとって造園活動とは、岩手県をイーハトーブに変える活動の一環だったのだと思います。彼の造園活動は、ちょうど農業の活動と文学の活動の中間に位置づけられるでしょう。賢治は土地の景観も非常に意識していました。富手への手紙の中で、「南斜花壇」を、どこからどのように見えるかを予想して設計したと語っています。まず温泉電車で来た人たちが花巻温泉駅から「南

斜花壇」を目にすれば、ひとまとまりの唐草模様をして見え、下方の「対称花壇」や「日時計花壇」から見上げてもしようとした模様として鑑賞できる。近づくとなんの模様だかはわからなくなってしまうが、個々の花を鑑賞したり摘み草したりできる。上っていくと頂部に小さなパーゴラがあって、そのあたりが展望台の役目を果たす。そこからは温泉全体が見えるだけでなく、花巻・北上の方の平野まで眺められる。視点や視線の動きを非常に上手く配慮した造りになっているわけですね。宮沢賢治が造った庭園の中でも最大規模で、いちばん独創的なのが「南斜花壇」です。

「南斜花壇」を造った一九二七年以降、賢治は知人宅に小規模な花壇を造ったようですが、これだけの規模のものは手がけていません。結核の再発や、東北砕石工場時代の外交販売で非常に忙しかったといった理由があっただろうと思います。花巻共立病院の中庭の庭園設計もやっていますが、農村風景を改良するというには程遠かった。彼の「装景」は、未完のプロジェクトに留まりました。ただ文学のなかで、賢治は、実際の花壇造りでは実現できなかった壮大な「装景」を表現しているのです。ずばり「装景手記」と題された詩。書かれたのは、花壇造りから手を引き出した一九二八年から一九三〇年頃と推定されています。その第二連――

ならや栗の wood land に点在する

ひなびた朱いろの山つゝじを燃してやるために

そのいちいちの株に

hale glow「燃えるような光の色」と white hot「発熱したような白」の Azalia を副けてやらねばならぬ

ヤマツツジの花は、私は盛岡郊外の高松公園の丘で見たことがあります、くすんだ朱色ですね。これだけでは充分じゃない、これをさらに輝かしいものとする必要があつて、そのために洋品種の園芸種のツツジ・アザリア（アザレア）を、山林のヤマツツジの各々の株に添えてやらなければならいと、実現の難しい壮大なアイディアが述べられています。アザリアは、盛岡高農三年次に親友たちと創刊した文芸同人誌『アザリア』の思い出に繋がっていたはずで、賢治にとって高い理想が凝縮された高貴な花木と思われます。郷土の景観に既存する要素をただ肯定するのではなく、別の要素をそれに加味して高めるといふ、賢治的な発想がここにも認められます。

つぎはもっと壮大なヴィジョンです。この詩の第十連――

平野が巨きな海のやうであるので

台地のはじには

あちこち白い巨きな燈台もたち

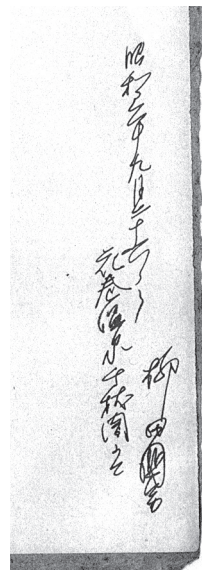
それはおのおのに

二千アールの稲沼の夜を照して

これをして強健な成長をなさしめる

台地の下に拡がる水田が海原に見立てられています。その台地の先端に燈台のようなものを建て、巨大なライトで夜の水田を照らそうというのです。それは「装景」であると同時に、電照菊（夜間に照明をあてることで開花時期を調整した菊）と同じように、電燈で稲の成長を促進する科学的農法でもある。SF的ではあるけれど、原理として実現不可能ではない。まさに農業改革と風景改革が一体のものとして表現されているわけです。しかも「南斜花壇」ともちよつと関係がありそうなのです。「南斜花壇」の敷地である小スキー場は日本初の夜間スキー場で、電燈に囲まれていました。賢治は富手へ送った一九二七年四月九日付の手紙で、この庭園を昼間だけではなくて夜も鑑賞できるようにしたい、ついでには夜間スキー用ライトを、交互に青い照明、赤い照明にして照らし出せば幻想的な庭園が現出するだろうと書いていました。さらに、頂部のパーゴラ内部に巨大なライトを設置し、花壇全体を照らし出したいとも書いています。

「グスコープドリの伝記」からはじめたので、「グスコープドリの伝記」に戻しましょう。「グスコープドリの伝記」の先駆形、「グスコンブドリの伝記」（一九三一年頃）で、寒流の勢いが強くなり、冷害の予兆が顕われだすと、ブドリはこんなことを考えています――「ブドリは潮汐発電所の電気を全部電燈に代へて沼ばたけを照らすことを考へてみました。けれどもそれは計算して見ると何にもならないのです」。発表稿でこの部分は削除されてしまっていますが、未完の詩「装景手記」に書いたイメージを童話の中に取り入れたものにほかなりません。



図④ 柳田国男の読了記が書き込まれた『LE SACRIFICE』（成城大学民俗学研究所蔵）

最後に、おまけ的な話を。明日、受講者の皆さんと私も遠野に行きますが、実は柳田国男と花巻温泉の関係というのがあるんです。柳田は、一九二六年夏に二度目の遠野旅行をし、その途上、花巻温泉に泊まっています。私は、さらに少なくとも柳田はもう一回は花巻温泉に泊まっていたというところに、ある資料によって気づきました。成城大学民俗学研究所の柳田文庫に収められている『LE SACRIFICE（犠牲）』というフランス語の本の最後に、柳田自身が書き込んだ読了記です〔図④〕。非常に癖のある字ですが、「昭和三年九月二十六日花巻温泉千秋閣にて」と書かれています。

柳田は一度目の花巻温泉宿泊後、「北の野の緑」（初出一九二七年、『雪国の春』（一九二八年）所収）というエッセイを書いています。東北の人が聞いたらおこるかもしれない内容です。東北地方の春から初夏の森林は美しいし、秋の紅葉も美しい。ところが夏の東北の山は非常に暗い。花巻温泉は「万事電気づくめの新式遊園地」だが、周囲の山を見るとやっぱり暗く、昼間なのにまるで夕方みたいな雰囲気だった。「何故に此山に百合の紅白、もしくは萱草のやうな赤い花でも、取り合せ

て見ようと思わぬのかと言つて見た」というんです。しかし、この時、花巻温泉には既に別荘間の「対称花壇」と「日時計花壇」があったものの、山裾の「南斜花壇」はまだありませんでした。もしかすると、昭和三年（一九二八）にふたたび花巻温泉に泊まった際、柳田はこの感想を変えたかもしれません。

1——亀井茂「『グスコープドロの伝記』の背景——初期冷害研究の流れと盛岡高等農林学校」『宮沢賢治』第八号（一九八八年十一月）参照。

2——佐々木民夫「花巻の温泉と宮沢賢治」『岩手郷土文学の研究』第二号（二〇〇一年三月）参照。

3——久保田大作『乾坤一擲 久保田大作自伝（私家版、二〇〇三年）五頁、三四頁。

4——森荘巳池「夏期仏教講習会のこと」『宮沢賢治全集』第十一巻、月報11（筑摩書房、一九六八年）。栗原敦「宮沢賢治——透明な軌道の上から」（新宿書房、一九九二年）三三頁。

5——柳昌子は『宮沢賢治「初期短篇綴」の世界』（無明舎出版、二〇〇〇年）三一～三二頁で、鶴飼の「新盛岡温泉」開湯を大正五年（一九一六）とする文献と、大正三年（一九一四）とする『岩手日報』記事を紹介し、「大正三年以降いくばくかの施設はあったものと考えたい」とコメントしている。『図説盛岡四百年』下巻Ⅱ（郷土文化研究会、一九九二年）三三二頁には、明治四十二年（一九〇九）に創立された「盛岡温泉株式会社」が開発し、「三年の歳月を閲して其の間修復や故障やらに手間どったが先月之が完成を見開業式も盛大に挙げた」という『岩手毎日新聞』記事（大正六年七月二十四日）が引用されている。大正三年（一九一四）に一応施設ができたが、すぐに故障してしまったのだろう。つまり、

大正七年七月、賢治は、オープンして一年ほどの新型温泉を体験したことになる。「麓^{ふもと}の引湯にぐったり今夜は寝てやるぞ」「沼森」といういい方には、喧伝^{けんでん}されていた新温泉に対する賢治の関心が聞き取れるのではないだろうか。

- 6——松橋和三郎・勝治親子。牛崎敏哉「なめとこ山の熊」の原風景——童話「なめとこ山の熊」の周辺」『北の文学』第二十号（一九九〇年五月）、同「小十郎の行方——童話「なめとこ山の熊」の周辺」『北の文学』（一九九二年五月）、中路正恒「なめとこ山の熊の胆」『季刊東北学』第十号（二〇〇七年一月）等を参照。

- 7——一九一八年四月十七日には、松橋親子が住んでいた豊沢集落・伊藤左工門方に賢治は泊まっていた（書簡五三、四月十六日付、宮沢政次郎宛）。

- 8——花巻温泉の温泉温室については、大原皓二「花巻温泉の沿革」（私家版、二〇〇六年）、『花巻温泉ニュース』一九三〇年一月号、同年五月号、同年十二月号、一九三二年三月号、一九三二年十二月号、一九三四年四月号を参照。台温泉の温泉温室については、『岩手日報』一九二六年二月二日を参照。

- 9——「富錦」がなにかは長らく不詳だったが、以下の論文で、芋のデンプンによる「代用米」を意味する語であることが解明された。中野由貴「宮澤賢治と味わう東北のおいしいもの（第19回）修学旅行復命書の富錦」『ワルトラワラ』第四十号（二〇一六年六月）。

- 10——従来一九二七年の書状と推定されているが、ここでは以下の考証を採用した。伊藤光弥『イーハトーブの植物学——花壇に秘められた宮沢賢治の生涯』（洋々社、二〇〇一年）一六〇頁。